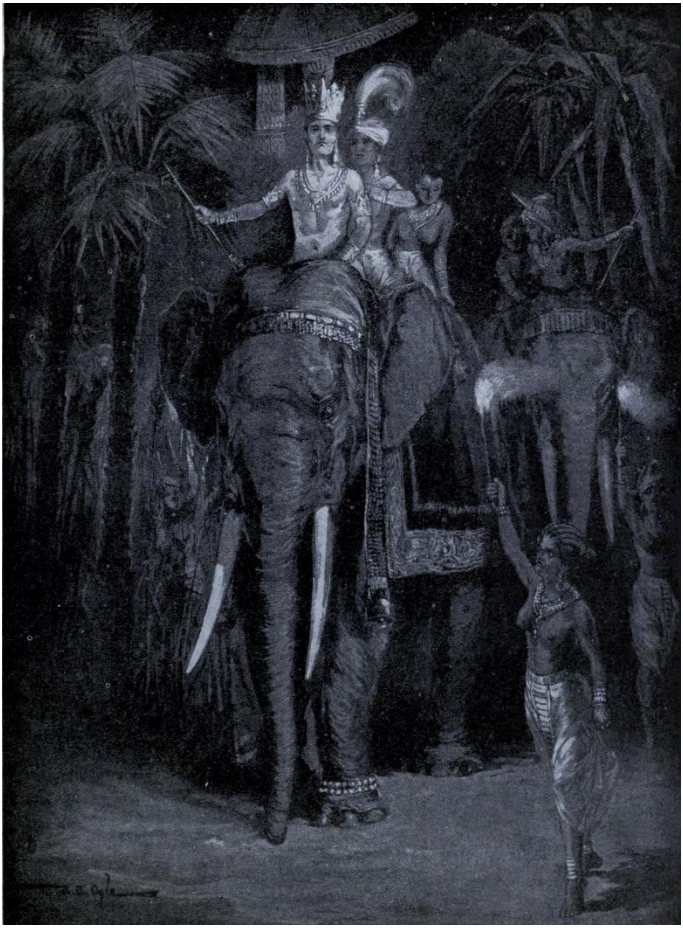
小説「阿難」を読む

ビンビサラ王とアジャセ王の救い

尾崎晃久



ビンビサラ王の死後、釈尊のもとを訪ねるアジャセ王
「Hutchinson's story of the nations」の挿絵より
このくだりは、「阿難」の 478 頁に記載されている

ビンビサラ王の幽閉

五井先生の「小説 阿難」（白光出版）は、釈迦十大弟子の一人、阿難を主人公にした長編小説です。

その中で、マカダ国のビンビサラ大王が、一人息子のアジャセ太子によって、牢屋に幽閉される話が出てまいります。仏典にも出てくる有名な話です。

ビンビサラ大王は、仏教最初の寺院である竹林精舎を建立した人です。仏教教団の最大の支援者でした。

マカダ国の位置

古代インドの十六大国の一つ

大王は、晩年になってようやくできた一人息子のアジャセに深い愛情を注いでいました。ところが、アジャセは、奴隷の娘との結婚を反対されたことをきっかけに、父親への憤懣が湧き上がってきて、「父親であるビンビサラ王は、自分のことを愛していないのではないか」という疑念にかられます。

その時、釈尊のいとこであるダイバダッタに「ビンビサラ王は、お前を殺そうとしている。殺される前に殺して、王となれ」と唆されます。ダイバダッタは、最初は釈尊に従っていましたが、念力的神通力を得て、釈尊に対抗して自分の教団を作っていました。

マカダ国の大臣のギバは、ダイバダッタがアジャセに取り入り、大王を殺させようとしていることを察知し、仏陀の知恵を借りようと、竹林精舎を訪ねます。

「世尊！この耆婆（ぎば）のために、明らかなる道をお示しください」とすがるギバに、釈尊は「耆婆（ぎば）よ。そなたこの人の世を如何なる世と思うているか？」と問い、次のようなやりとりがなされます。

「はい、如来世尊のみ教によりますれば、この世は無明の想念所業によりて生じましたる世でございます」

「では、この世における肉の身は永遠性のものであるか、否か？」

「世尊よ、勿論、永遠のものではなく、時間的に消え去るものであります」

「さすれば、そなたの身も、大王の身も、共に、ある時間によって、この世から消え去ることは確実ということになるな」

「左様でございます」

「耆婆よ、肉の身は必ず消え去るものとなせば、肉の身の変滅に想い把われ、肉の身の悲哀に執する感情は、本来心、如来につながるものではない。

この世はすべて因縁の和合によって生じ滅し、過去世よりの想念所業のうつりめぐりによって、恨み、怨まれ、討ち討たるるものであって、これ人間の本心のなせることではない。

耆婆よ、そなたの摩訶陀国への忠節、大王の身を護らんとする苦衷は、察するに難くなけれど、大王並びに太子の本心開発のためには、如何ようになさば、最適なるかは、如来の他にこれを知るものはないのである。本心を覆える宿怨の業はぬぐうべき時期にぬぐい去り置くことがよいのであって、これを逃れんとして立惑うことは、かえって業の波の渦巻きを烈しくなすだけである」（「阿難」３８７～３８８頁）

ギバは、どうやったら、この危機を回避できるのか、いくら考えても良い方法手段が思い浮かばず、苦悶していたのですが、釈尊は、「大王と太子の本心開発のためには、どのようにするのが最も良いかは、如来のみが知っていることである」と仰いました。

本当に、その人の本心開発のために、どうするのが一番良いかは、神様のみがご存じのことであり、肉体人間の小智才覚の想いでわかるものではありません。

釈尊は、大王の肉の身の救われではなく、今まさに、二人の間にある過去からの業因縁が大きく浄められ、如来の大慈悲によって、二人が真の救われの道に導かれようとしていることを、お説きになります。

釈尊によると、大王と王子との宿怨（しゅくえん）は、大王の子孫を残さんとする執着より起ったものでした。

大王は、自分に子供がいないことを憂いて、相者（うらないしゃ）に占ってもらったことがありました。その時、相者は、「大王の王子として生れ変わる者は、今ある山中に住まう某仙人であって、未だ宿命残れる故、王子の出産は急速にはまいりませぬ」と答えました。この言葉を聞いた大王の家臣が、そうすることが忠義と思い違え、その仙人を殺してしまいました。

その仙人が、アジャセ太子の前世だったわけです。

ビンビサラ王は、息子のことを深く愛していたにも関わらず、かえって憎まれてしまいました。

その原因はアジャセが前生において、ビンビサラ王の執着心が原因で、肉体生命を奪われてしまったことにあったわけです。

その時の恨みの想いが、潜在意識の中に蓄積されていました。そこに、ダイバダッタの妄念が、アジャセの中にあった大王への憎悪の想いを外に引き出させ、火をつけたわけです。

このように、この世に現れてくる様々な人間関係の不調和は、すべて過去世からのお互いの因縁の消えてゆく姿です。いくら相手のために、尽くしても良くしても、かえって恨まれて、嫌われることがありますが、それはやはり、過去世において相手に嫌われるようなことをしてしまっているのでしょう。

釈尊は「耆婆（ぎば）よ、悲しむではない。如来の慈悲は、禍を変じて、常に福となすのである。そうした阿闍世（あじゃせ）の大逆が、かえって阿闍世を根底から救うことになるのであって、大王にとっても、阿闍世にとっても、本心開発への最も短い距離を歩むことになり、彼等に永遠の生命を悟らせることになるのである。

耆婆（ぎば）よ、大王には如何なる時においても、如来（にょらい）につながりおることを忘れず、我が名を呼ぶがよい、と伝えよ。その一事が、大王を救うただ一つのなさねばならぬことである。また事（こと）ついに起りなば、そなたは阿闍世（あじゃせ）を離れず、阿闍世の心を計りて、程よき時に我が下に連れてまいるがよい。父子共に如来が必ず救いの道に導き入れるであろう」と優しく慰めます。

普通のものの見方では、アジャセは人の道を大きく踏み外そうとしているようにしか見えないわけですが、かえって本心開発への最短距離を歩むことになるのだ、と釈尊は高い観点からご覧になっておられます。

アジャセの中に潜んでいた憎悪の想いが、反逆行為となり、消えてゆく姿として表面に現れてくることによって、過去からの業が大きく浄められ、消え去った後、本心が大きく開かれてくることになるわけです。

消えてゆく姿で世界平和の祈りが、まさに禍(わざわい)を変じて福となすという教えです。

禍、不幸災難が現れてきた時、「ああ、こういう形で過去からの業が消えてゆき、消えてゆくにしたがって良くなっていくんだ。守護霊様、守護神様有難うございます。世界人類が平和でありますように」と祈りの中に入ることによって、本当に禍が大きく浄められ、本心が大きく開かれ、運命が光明化していくわけです。

禍に把れて、嘆き悲しみ、暗い不幸な気持ちの中に沈んでいるだけでは、業を掴んでいることになりますので、禍を変じて福となすにはなりません。

禍を消えてゆく姿と観じて、神様への感謝の祈りに切り替えていくことで、禍を変じて福となす、真の幸福の道へ、自分も他人も導かれていくことになります。

釈迦牟尼如来の称名

この後、アジャセは王位につき、ビンビサラ王を牢屋に幽閉します。ギバは、ビンビサラ王に、「いかなる時も我が名を呼べ」という釈尊の言葉を伝えました。

大王は牢獄の中で食事も与えられず、餓死を待つだけの身となりました。暗い石牢内で大王は放心寸前の中、釈迦牟尼世尊(しゃかむにせそん)、釈迦牟尼世尊と唱えつづけました。

「阿難」の４１０頁、涙なくして読めない場面です。

ハスの花

〝先頃までのすべての権威は剥がれ、老王は一人の重罪人として、冷たい石牢に閉じこめられている。ここに閉じこめた相手は、愛しつづけてきた実の息子である。老王の悲哀は、日々自らの骨を削り、肉を剥いでいった。しかし、阿闍世に対する憎しみは、不思議と湧き上がって来ないのであった。何故か、かえって、我が子に対する愛情が、沸々として涙と共に溢れ出てくるのである。

あの子は苦しんでいる。宿怨の囚となって、提婆の呪術に踊らされている。真に憎むべきは提婆である。あの提婆こそ！老王は、憎しみの想いを提婆に集中させよう、と意志してみるが、その想いも、心の奥から唱えつづけている釈迦牟尼如来の称名に、いつしらず消え去っていって、意識の表面には、そうした鋭い想いは一時刻として止まっていないのである。

老王は今、想念なき人のごとく、ただ全身全霊を釈迦牟尼世尊に委ねきっていた。釈迦牟尼世尊、ただそのみ光だけが、老王を地獄絵から救い上げているのである。〟

〝老王は激しい憎悪の感情の中にあっても、如来の称名を忘れなかった。

忠臣耆婆が、世尊からの、ただ一つのみ教として老王に伝えてくれた、我が名を称えよ、の一言が、老王の心に生命の灯として光っていたのである。

老王の肉体が、日々衰えてゆくように、提婆への憎悪も、如来の称名の光に次第に薄れて、この日などは、意識して憎もうとしても、忽ちその憎しみの感情が消え去っている程、老王の心は、釈迦牟尼世尊のみ光の中に溶けこんでいるのであった。

彼にもし仏陀への信仰がなかったならば、阿闍世の大逆への怒りと、提婆への憎悪とで、地獄さながらの想念の中に、狂い死にしていたに違いなかった。

業想念、宿怨の波の中から、老王を救い出していたのは、彼の持つ、仏陀への信の想いだけであった。〟

王に信仰心なく、激しい憎悪と絶望の想いを強く持ったまま亡くなっていれば、そのような想念に合致した世界に行っていたことでしょう。

しかし、王には、釈迦牟尼世尊の称名がありました。激しい憎悪や悲哀の感情の中にあっても、ひたすら釈迦牟尼世尊、釈迦牟尼世尊と呼び続けました。

すべてを救わんとする釈尊の慈悲の大光明によって、憎しみの想いがどんどん浄められ、消えていき、いつしか、自分の心が如来の中に溶け込んでいきました。

ビンビサラ王は釈迦牟尼如来の称名を通して、業生の世界を超えて、御仏の大光明の世界、自己の内なる如来心（本心）の中に入っていったのです。

仏教学者は何かと哲学的に難しく解説しますが、大王は、釈尊の「我が名を唱えよ」という、たった一つのシンプルなことにひたすら徹することで、地獄の想いの渦から抜け出していったわけです。

五井先生も、「私の名前を呼びなさい。私が必ず救ってあげますよ」とよく仰っておられました。

私も、ここまで絶体絶命の環境に置かれたことはありませんが、これまで、五井先生を思い続けることで、自分の中の苦悩の想いが薄れていって、消え去っていったという体験を何度もしました。

いろんな悩みの想いや、暗い想いがあって、その想いの中にあって、五井先生のことを思い続けることで、五井先生の光の中に想いが吸収され、消え去っていき、自分の心が安らいでいく実感を得ました。

やがて、一定の年数はかかりましたが、祈りの中から、自分が神より来た生命であるという自覚が自然と深まってきました。五井先生の称名によって、私は心の平安を得ることができ、魂の救いを実感致しました。

死期が近づいていることを悟った王は、死ぬ前に、釈尊に我が子の将来のことをお願いしたいと思い、「世尊、どうぞ我が前にみ姿を現わし給え」と、釈迦牟尼世尊との対面を念じつづけました。

念じつづけているうち、石牢内が、紫金色に輝き出し、金色の光の中から、釈尊が、左右に目連、阿難の両長老を従え、霊的にお姿を現されました。（４１５頁）

〃「あっ、釈迦牟尼世尊（しゃかむにせそん）！正に釈迦牟尼世尊！」

老王は形を正してみ姿に向って合掌した。感激の涙

が、胸元に込みあげてきて、嗚咽となって溢れ落ちた。

「尊き仏如来！有難き極み。有難き極み」

老王は自己のすべてが、光明一元に包まれている感じで、暫くは此処、このまま仏国浄土の実観にひたりきっていた。〃

この時、大王の妃である、イダイケ夫人が牢屋内に入ってきて、仏浄土そのままの瑞雲が漂っている光り輝いた光景に驚き、跪いて合掌しました。

「仏世尊！どうぞ、我が子阿闍世をお救い下され、どうぞ阿闍世の迷妄を目醒めさせ給え！」と老王と夫人は、何度びも繰り返し懇願します。

「仏世尊！誠に世尊の仰せ給いし如く、人の世の栄華は有限のものでございました。真に真に人の世の栄華は夢幻のようでござった。我れこの国の王たりし時は、国は広やかで、衣食も心のままであり、人は何人たりとも我が想いのままに動き申した。しかしながら我が肉の身の只今の境界は、石牢の中の囚われ人、公然と食することも出来得ぬ状態、我が肉の身は、ほとほと弱りはて、明日をも知れぬ生命の危機をむかえておりまする。しかれども、我は幸いにして、仏世尊のみ教を受けし者、人の生命は、肉身のみにあらざることを、心に銘記致しております上、先頃、耆婆を通じての世尊のみ教、常に我が名を呼べとのおんこと、心に沁みて有難く、我が生命、今肉の身を離るるといえど、我が心は常に、仏世尊のみ許に仕えまつれることと確信致しておりまする。

真に真に有難き我が身でござりまする。我がことは、このように仏世尊にお任せ致しております故、何一つ心懸りはございませぬが、先程よりお願い申しておりますように、愚息阿闍世のことのみ気がかりにて、この世を離るる足枷となりまする。何卒何卒阿闍世を真の人間にお磨き下さるよう、宜しく宜しく願い上げます」

老王の懇願に対し、釈尊の澄み通ったお声が、はっきりと聞こえてきました。

「老王よ、夫人よ、おん身等の信の心、真に目出度きことである。日夜我れを呼ぶおん身らの声は、如来の耳にとくから入っておったのであるが、本日は老王

の心、殊更烈しく我れを呼べるにより、目連、阿難を伴うて此処にまいったのである。

老王よ、おん身の想いはもはや如来の中にある、おん身は、すでに肉の身を離れたるも同様、再び輪廻の世界に還えることはない。

夫人よ、そなたも、遠からず老王の後を追いて来る者、老王一歩先に去るとも哀しむものではない。両人の信は、如来の心に適うものである。また、阿闍世王のこと、おん身等の案ずるのも無理からぬことではあるが、おん身等が肉の身を去ることにより、彼の宿怨の霽るるは必定、彼は必ず我が下にまいって、おん身の慈愛に報ゆるであろう。

阿闍世王のことは、今後心にかくるに及ばぬ。彼は、忠臣耆婆の導きによって、仏の教に入り、業の波を超ゆることとなる。このこと、必ず事実となるのであるから、心を安らかに新しき世界の住者となるがよい」

釈尊の言葉に、二人は合掌したまま、涙を流し感謝の言葉を述べたのでした。

この時、王は、ひたすらなる釈迦牟尼如来の称名を通して、肉体の死に対する恐怖や、憎悪の想いを超え、如来心と一体となり、人間が肉体ではなく、永遠の生命であることを確信する、深い心境に入っていました。

ただ一つ、息子であるアジャセのことだけが気がかりで、釈尊との対面を念じ続けていました。王の信仰心の深さに応えて、釈尊が霊的に現れたわけです。

さぞかし、神々しい素晴らしい情景だったであろうと思われますが、ややもすると、自分も神霊の姿を見たり、声を聴いたりする神秘体験をしたい、ということにばかり関心がいく人もいるかもしれません。

しかし、宗教の道にとって大事なことは、あくまでも自我欲望の想いを消えてゆく姿にして、本心を開発して、調和した円満な人格になることで、そのことを忘れていたずらに霊的現象ばかり追い求めていたのでは、それこそ、ダイバダッタのように、幽界波動の影響を受けて、道を外れてしまうことになりかねません。

大事なのは、ビンビサラ王が、釈迦牟尼如来の称名を通して、憎しみや悲哀などの業生の波を超え、如来

の心（本心）と一体となったということであります。

釈尊は、本当に、その人にとって必要な時だけ、このように霊的にお姿をお見せになられたわけで、見たり聞いたりしたことが、かえって本心開発の妨げになったのでは何にもなりません。

私たちも、五井先生とお呼びすることで、自分では気づかなくても、その場に霊身の五井先生が現れて下さっていることもあるでしょうし、そうでなくても、五井先生の大光明波動が流れてきているのは間違いありません。

釈尊は、「おん身は、すでに肉の身を離れたるも同様、再び輪廻の世界に還えることはない」と王に告げておられます。

仏教では、業が輪廻するといいます。三界（肉体界、幽界、霊界の下層）を業が輪のようにぐるぐる廻っている。その業因縁の世界を超えて、如来心と完全に一体となっているから、もうあなたは、この世に再び生まれ変わることはない。これからは、あなた方は光り輝いた天界の住人として生きていくのである、と仰られたわけです。

人間が肉体だけの存在だという、唯物的なものの見方をすれば、仏教教団の最大の支援者だった王が、最後、自分の子供に反逆され、牢屋の中で餓死するなど、あまりにも悲惨で、いったいどこに救いがあるのか、と思うわけですが、そうではないわけです。

御仏にとっては、王の肉の身が救われるということは、問題ではなかったわけです。

人間は無限億万年永遠に生き続ける神の生命です。ここで過去からの業をすっかりきれいに払い浄めて、神我一体感、永遠の生命を体得させようということが、御仏の慈悲であったわけです。

私たちも、五井先生の称名を通して、業想念を超え、神様の世界の住者となることができます。

たとえ亡くなる直前、死に対する恐怖の想いや、この世に執着する想いが激しく湧いてきて、その波に流されそうになっても、五井先生と呼び続けることを通して、その人は光り輝いた世界に行くことができます。

私自身は、肉体を離れるのはまだだいぶ先のことに

思われるわけですが、人間は肉体が亡くなってから、幽界や、神界に行くわけではありません。

例えば、いつも人を憎んだり、嫉妬したりしている人は、幽界の迷いの波の中で生活しているわけです。

そういう想いが湧いてきても、消えてゆく姿と観て、世界平和の祈りを祈り、五井先生の光の中に入っている人は、神様の光の世界に住んでいる。肉体界にいながら、幽界の地獄のような想いの世界で住んでいる人もいれば、神界の光り輝いた世界に住んでいる人もいるわけです。

アジャセ王の救い

アジャセ王は、ダイバダッタの呪術に幻惑されながら、良心と迷との烈しい葛藤に苦しんでいましたが、神智を受けたギバの説得により、正気に戻ります。自分の行為の誤りに気づき、父親を解放しようと、牢屋に赴いた時、ビンビサラはすでに亡くなっていました。

申し訳ないことをしたと涙を流すアジャセでしたが、父王の亡骸（なきがら）の顔を見ると、口元に明らかな微笑を浮かべ、にっこりと微笑んでいることに驚きます。

「母君、母君、父君のこの安らかさ、この安らかさは、どうしたことでございましょう?私への恨みに燃え、憤りにたぎりきった、鋭いお顔をしていらっしゃるかと思っておりましたが、この安らかさ、この清らかさは、一体何んという不思議、何んという奇蹟でございましょう。私の狂気が、このような地獄のはてに父君を押し籠め奉って、父君に死よりも辛い、みじめさを味あわせてしまいましたが、この安らかなご容貌は、大反逆への慚愧（ざんき）の念に身心を裂くばかりの私の苦悩を、救い取って下さるような気が致します」

「阿闍世（あじゃせ）王よ、父君のご最期（さいご）はご立派でありました。父君は、決してそなたを恨みに思ってはおられませんでした。いや、かえってそなたの身を案じ、そなたとお国の運命のみを案じつづけ、祈りつづけておられました。

そして最後まで仏陀世尊（ぶっだせそん）に帰一奉って、永遠の旅立ちをなされたのでございます」（４２８～４２９頁）

やがて、イダイケ夫人も、これまでの心労もあり亡くなり、アジャセは、自分の心の迷いから両親を死に追いやってしまったという良心の呵責から、自分の心を責めさばき、苦悩します。

ダイバダッタが亡くなったことを契機に、アジャセはギバの薦めにより、釈尊のみ教えを受けることを決意します。

アジャセは、巨象那羅祇梨に乗り、多くの従者を従え、菴羅林園（ギバが釈尊のために建てた精舎）に滞在中の釈尊を訪ねます。（表紙裏の挿絵）

安心立命を求めるアジャセに、釈尊はこのように答えられます。（４８６～４８７頁）

「王よ、おん身の今日までなし来ったことは、その日までの所業であって、すべて今日のおん身の所業ではない。今我が前にいるおん身は、過去における業の所業を、懺悔という想念によって、おん身の身心からすでに振り払い、振り捨て去っているのである。

父王を殺害し、提婆に組して如来を侵そうとしたる等の行為は、過去世からのそれぞれの業因縁を超え得ざりし無智より起りしものではあるが、おん身が真にその誤りを懺悔せることによって、おん身の本心は、それらの業の所業とはっきり分離されたのである」

「今日我が前にいる阿闍世王と、過去における阿闍世王とは、本心の世界においては、何等のつながりも持たぬものなのである。

すでに過ぎ去りゆかんとする波を、手を伸ばして止めることはない。おん身は今日までのすべての想念の波を、仏の大海に放ち去るがよい。そして、今日からの想念は、仏の大海原より流れ出づるものと想い、明るく、すこやかなる生き方をつづけることである」

アジャセは、釈尊の言葉に感激し、深い迷妄から醒めた心地がして、仏陀に帰依することを誓い、優婆塞（在家の仏教信者）となります。

アジャセ王の背後には、天界の住者となった霊身のビンビサラ王夫妻が、喜びの眸を輝かせて、光り輝いて立っているのでした。

五井先生は霊覚によって「阿難」を書いておられるので、仏典で伝わっている話とは若干細部の内容が異

なっていますが、基本的な流れは同じだと思います。

アジャセは、仏教教団最大の保護者となり、釈尊入滅後の仏典結集（ぶってんけつじゅう）（仏典を編集する事業）の際には、必要な資材を提供して援助したと伝わっています。

私たちも、ここまで大きなことでなくても、過去に、人の生命を痛めつけ、不利益を与えるような行為をしたことが大なり小なりあろうかと思います。

その過去の行為を捕まえて、悪かった、悪かったと自分を責めさばいて、心を暗くしていることは神の御心に叶うことではありません。

過ちを犯した過去の自分というのは、過去世からの業因縁の波の消えてゆく姿であって、光り輝いた自己の本心とは何の関係もないのです。

菩提樹の葉

「ああ、私は間違ったことをしてしまった。こういう過ちは二度としまい」と反省して心に強く誓った時点で、その業は消えてゆく姿となって、その人の本心から離れていくのです。

過ぎ去った過去の出来事も、それに把れて、自己を責めさばく想いも、ともに消えてゆく姿と思って、平和の祈りの中に投入してしまうことです。

そして平和の祈りの中から、神様の御心を頂きなおして、神の子として明るくおおらかな生き方をしていくことが大事だと思います。

過ちを犯した過去の自分と、平和の祈りを祈って本心と一体となっている今の自分は、全く別です。

アジャセ王の場合は、彼の為した行為を、ビンビサラ王がすでに赦していました。

では、もし自分の過去の行いによって、他人に迷惑をかけてしまって、そのことを相手がいまだに怨んでいる場合は、どのように思えばいいでしょうか？

その場合でも、自分を責めたところで、相手は良くなりませんし、自分の心も暗くなりますし、誰のためにもなりません。相手によく謝り、誠意を持って対応するのは当然として、平和の祈りを祈って、その人の天命完うを祈らせて頂くことが一番だと思います。

相手に１００の不利益を与えてしまったのであれば、今度は１０００良いことをすることです。平和の祈りを祈り、神様の慈愛の光を送ることが、その人の今後の運命を光明化させることになるのですから、今度は愛の行いを為していることになります。

途中、どのような人間関係の不調和が現れてきても、ひたすら過去世の因縁の消えてゆく姿と思って、世界平和の祈りを祈り、守護の神霊と五井先生に感謝し続けていれば、自分が救われるだけでなく、自分に関連するすべての人たちが、五井先生の大慈悲によって、みんな救われの道に導かれていくのだと、固く信じることが大事だと思います。

アジャセ王のように、劇的に本心に目覚めるということでなくても、今生では深い信仰心に目覚めなかったとしても、神様の大慈悲が、その人を天命完うの良き方向へ導いて下さるのは間違いありません。

いかなる時も五井先生を呼び続けることで、その人は必ず救われます。どんな暗闇の中にあっても、五井先生が、その人を業の波から救い上げて下さいます。

途中、不都合なことが現れても、「お祈りしているのに、なぜ、こんな悪いことが出てくるのか。こんな祈りが、本当に効果があるのか。神さまはちゃんと守ってくれているのか」と文句をいうのではなく、「ああ、これも、守護霊様、守護神様が、私のことを深く愛して下さっているから、過去からの業をこういう形で浄めて、私の魂を立派にさせようと思われているんだな。私にとって一番良きようにして下さるんだな。有難うございます」と神様の愛に委ねて、祈り続けていきたいと思います。

神の愛を信じて、自己の運命をお任せして祈り続けている人の未来が悪くなることはありません。必ず自分も他人も明るく輝く道へ導かれてまいります。

ハスの蕾

小説「阿難」を読む（無料）
2019 年 8 月 25 日発行
著者：尾崎晃久